

佐久川 政吉

沖縄県立看護大学 講師

## 脳血管障害高齢者の在宅復帰支援に関する基礎的研究

### 回復期リハビリテーション病棟からの転帰先と看護師の現状

調査 1 では、回復期リハビリテーション病棟に入院した脳血管障害高齢者の転帰先と性別、年齢、入院経路、入院期間との関連を明らかにした。在宅復帰は男性 42.2%、女性 55.8% 「65～74 歳」55.6%、「75～84 歳」50.0%、「85 歳以上」18.2%。「自宅から入院し在宅復帰」61.5%、「自宅以外から入院し在宅復帰」46.7%。入院期間が「90 日未満」では在宅復帰の割合が高かった。

調査 2 では、看護師の在宅復帰支援に関する現状を明らかにした。カンファレンスへの本人の参加は「内容によって」84.6%、「必ず参加する」15.4%で、看護師の役割は、「本人の状況の説明」61.5%、「本人の発言を促す」21.2%であった。本人への転帰先を「必ず聞いている」25.0%であった。退院指導は「合併症への指導」48.1%、「ADL の指導」26.9%であった。在宅訪問について「ぜひ必要」25.0%であった。在宅訪問の経験「有り」38.5%で、平均訪問回数は 3.8 回であった。在宅ケア専門職との連携の経験は「有り」23.1%。在宅訪問経験者は、在宅訪問後に「自宅での生活に合わせた ADL 拡大のためのケア」85.0%、「家族への介護技術等の指導」55.0%を行っていた。在宅復帰阻害要因として、「家族の精神面」36.5%、「本人の社会面」25.0%、「本人の身体面」23.1%を認識していた。